南極

第１９号
平成１６年４月１５日
南 極 倶 楽 部 会 報

南極倶楽部ヒマラヤ紀行

マナスル遠征 50 周年記念

JARE 1956 年 ← JHE 1953 年 ＋ 50 年 ⇒ 2003 年

（日本南極観測隊開始）（日本山岳会マナスル登山隊・登頂 1956 年）（第 44 次・45 次南極観測隊）

村山雅美

「万歳と歓声とテープの嵐の中を、宗谷は東京晴海埠頭を静かに離れた。ワァット耳に入る音が人の声と、飛行機の豪音と船の汽笛と入り交じっている。宗谷は東京港内の大小の船の狭間を縫うように船足も軽く快調に進む。この波路は遠く南極の氷海にまで連なっているのだ。港内の船という船から我々のこの門出を祝福する汽笛が雨空に鳴り渡っていた。」と南極観測隊の第一報が 1956 年 11 月 8 日、全国の夕刊一面トップを飾った。宗谷船上の田英夫報道隊員が今の携帯電話にあたる伝書鳩便による南極観測隊の歴史的な第一信だった。

「宗谷」に始まり、「ふじ」、「しらせ」に続く南極観測は今や「しらせ」も老朽、2007 年には退役、さりとて後継船建造の財源は現状では儘ならず、南極観測の継続も危ぶまれていた。

谷垣財務相は 16 年度予算の策定にあたり、「地球環境の変動を鋭敏に捉える南極観測は既に五十年近く続いています。『継続は力なり』といわれるように南極観測は継続こそ重要且つ必要です。私も若い頃は仲間が次々に行く南極を、今度こそはと指名を待ち続けるほど行きたかったものです。」と心強い新聞発表をされた。東大スキー山岳部の主要部員だった彼の裁量を信じて、私は南極観測継続を南極 OB による南極アピールのためヒマラヤへ旅立った。

私は 1953 年からマナスル遠征に参加したが、惜しくも 7750 m に達したものの失敗。必勝をかけた再起の 1954 年には、地元サマで部落を上げての登山隊拒否にあった。堀田隊長から現地で調停役を命じられたが、不調に終わった。一方、日本山岳会は首脳をカトマンズへ送り、ネパール政府の要人、現地の知事、サマ村長との会談の焦点

は案の定、ゴンパ再建の資金ほしさの行動だった。政府の命令は地方では紙くず同様の威令しかない土地柄、現地を確認しなくては、と私は 1955 年 9 月、新任のサーダー、盛名高いガルツェン・ノルブを伴い秋のブリガンダッキを遡った。一縷の望みは金次第と見極め、宿縁のマナスルから年末に帰国するや、西堀さんに呼び出された。サマの状況報告と思いきや、唐突に「南極を手伝え！」と強引な命令。「南極の話は山で耳にしましたが、西堀さんはどんな関係に？」。「学術会議の諮問に対して山岳会から推薦された副隊長や」。「隊長は誰？」。「永田はんといわはるお偉いお方や」。といった問答の末、春秋の筆法によれば、私には「マナスルが南極の原点」となったわけである。そこで南極観測の継続をアピールする狙いで、企てたのがこのヒマラヤ展望の旅であった。予算折衝の折から新聞紙上には「スケールの大きな南極同窓会」、「ヒマラヤを背景に南極男の宴」と書き立てられもした。嘗って南極観測隊員だったばかりに、今やヒマラヤにこの人ありと言われる宮原君はこの旅に最大の便宜の提供してくれ、次の二十五人の南極 OB 会関係の有志は第三の極地ヒマラヤへ向かった。（1 次夏・設営、2 次副隊長、3 次副隊長、5 次隊長、7 次隊長、9 次隊長、15 次隊長）

A 班　アンナプルナ放浪班：倉田篤、古田逸子、向井正興、伊藤敦之（4 名）（以下敬称略）

B 班　エベレスト展望班：吉川暢一、深瀬和巳、三田安則、吉野正明、渡辺千恵子、岡田和子、田中早智子、宮地檀子、丸山ナミ（9 名）

C 班　マナスル回顧班：村山雅美、Craig Davis Webster（村山の甥）、小堺秀男、遠藤八十一、小林昭男、西部暢一、鈴木淳平、草刈信行、練木允雄、安井和憲、吉田光雄、宮原巍（12 名）　＋　Sushma Omata（1953 年以来、JHE がお世話になったシャハ家の息女）

マナスルを望む
（1950 年代のサマ）